

目

次

1	文	4
2	文節	4
3	文節の種類	4
4	品詞の種類	5
5	動詞の活用	6
6	動詞の活用の種類の見分け方	7
7	誤りやすい動詞の活用の行	8
8	形容詞の活用	9
9	形容動詞の活用	9
10	動詞・形容詞の音便	10
11	形容詞・形容動詞の語幹の用法	10
12	名詞の種類	11

13	連体詞の例	11
14	副詞の種類	12
15	接続詞の種類	13
16	感動詞の種類	13
17	助動詞	14
18	助詞	28
	《係り結びのきまり》	38
19	敬語	44
20	「給ふ」の二種	45
21	最高尊敬語	45
22	二人の人物を敬う敬語	45
23	文の構造	46

助動詞・助詞 一覧

(アイウエオ順
数字はページ数)

か	か	40
が	が	28
かし	かし	43
かな	かな	43
から	から	31
き	き	16
けむ(けん)	けむ(けん)	21
けり	けり	16
こそ	こそ	41
ごとし	ごとし	27
さす	さす	15
さへ	さへ	35
し	し	36
じ	じ	24

して	して	32
しむ	しむ	15
す	す	15
〈す〉	〈す〉	15
ず	ず	17
すら	すら	35
ぞ	ぞ	39
たし	たし	27
だに	だに	35
たり	たり	19
つ	つ	18
つつ	つつ	34
て	て	34
で	で	34
てしが(な)	てしが(な)	42
と	と	29
ど	ど	33
とも	とも	34
ども	ども	33
な	な	41

(な)——そ	(な)——そ	42
ながら	ながら	35
など	など	36
なむ(なん)	なむ(なん)	39
なり	なり	26
に	に	30
にしが(な)	にしが(な)	42
にて	にて	32
ぬ	ぬ	17
ね	ね	43
の	の	28
のみ	のみ	36
は	は	37
ばかり	ばかり	36
ばや	ばや	42
へ	へ	31
べし	べし	23
まし	まし	22
まじ	まじ	25

まで	まで	37
まほし	まほし	27
む(ん)	む(ん)	20
むず(んず)	むず(んず)	20
めり	めり	22
も	も	37
もが(な)	もが(な)	42
や	や	40
〈ゆ〉	〈ゆ〉	14
〈ゆ・ゆり〉	〈ゆ・ゆり〉	31
よ	よ	43
〈よ〉	〈よ〉	31
より	より	31
らし	らし	23
らむ(らん)	らむ(らん)	21
〈らゆ〉	〈らゆ〉	14
らる	らる	14
り	り	19
る	る	14
を	を	29

単語		自立語		付属語	
活用しない	活用する	活用しない	活用する	主語にならない	単独で主語になる
活用しない	活用する	主語にならない	単独で述語になる	単独で主語になる	おもにウ段の音で終わる
					おもに「し」で終わる
活用しない	活用する	主語にならない	単独で述語になる	単独で主語になる	体言を修飾する
					おもに [] を修飾する
活用しない	活用する	主語にならない	単独で述語になる	単独で主語になる	接続に用いる
					独立して用いる
⑩	⑨	⑧ 感動詞	⑦ 接続詞	⑥	⑤ 連体詞
				④ 名詞	③
				②	①

4 品詞の種類

⑥ 独立語	⑤ 並立語
他の文節との関係が薄く、独立して用いられるもの	二つ以上の文節が、対等の資格で並んでいるもの。

- (1) 古京はすでに荒れて、新都はいまだ成らず。(方丈記)
- (2) 少納言よ、香炉峰の雪はいかならむ。(枕草子)
- (3) 寺のさまざまいとあはれなり。(源氏物語)

④	③	②	①	
ドナナニ・何ヲ	ドナナ・何ノ	何ダ ドナナダ	ドウスル ドナナダ	何ガ 用例

3 文節の種類

文節には、次のような種類がある。
主語、述語、連体修飾、連用修飾、並立語、独立語

2 文節

意味がとれて、読んでも不自然でない程度に小さく区切ったことば。
ふもとに／小さき／庵／ありけり。

1 文

ひとつのまとまった思想や感情などを表す一つづきのことば。

問1 次の——線部の文節の種類は何か。上の段の用例欄

の該当するところに、A～Hの記号で入れよ。

- A これ忠臣の法なり。(源平盛衰記)
- B 遠くも来にけるかな。(伊勢物語)
- C あはれ、いと寒しや。(源氏物語)
- D 月、いと明かし。(紫式部日記)
- E 清くつめたきこと限りなし。(更級日記)
- F つゆ音なふものなし。(徒然草)
- G をかしげなる猫なり。(更級日記)
- H この夕かけにうぐひす鳴くも。(万葉集)

問2 次の文を文節に分け、その種類を上の番号を用いて、

右側に書け。

〈例〉ふもとに／小さき／庵／ありけり。

- (1) 古京はすでに荒れて、新都はいまだ成らず。(方丈記)

5 動詞の活用

用法	ラ変	ナ変	サ変	カ変	下二段	下一段	上二段	上一段	四段	種類/活用形
「ず」をつけて に続く	ら	な				け		い	ア	未然
「たり」をつけて に続く	り	に				け	い	い	い	連用
言い切る		ぬ				ける		いる	ウ	終止
名詞に 続く	る		する	くる		ける	うる	いる	ウ	連体
「ど」「ども」 に続く	れ		すれ	くれ	うれ	けれ		いれ	エ	已然
命令して 言い切る	れ	ね	せよ	(こ)よ	エよ	けよ	いよ	いよ	エ	命令

▼ひらがなの部分は変化しない。

問3

次の各行の活用表を作れ。

活用の種類	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
活用の種類	ハ行四段	ガ行四段	ナ行上一段	ワ行上一段	マ行上一段	ラ行上一段	ハ行下二段	ヤ行下二段	ワ行下二段	ダ行下二段
未然										
連用										
終止										
連体										
已然										
命令										

6 動詞の活用の種類の見分け方

記憶しておくべきもの

ラ変	ナ変	サ変	カ変	下二段	上一段
		す(「恋す」などの複合語あり)	(一語)	(一語)	着る・似る・煮る・干る・射る・ 居る・率る・用ゐる

右のほかの語は、打消の助動詞「ず」を付ける。

「ず」を付けて

「〜アず」となるもの	「〜イず」となるもの	「〜エず」となるもの

問4

次の線の語の活用表を作れ。

① うぐひすの谷より出づる声なくは春くることを誰か知らまし (古今集)

② 子は口を閉ぢて眠らんとして寝ねられず。(奥の細道)

③ わづかに見つつ、心も得ず、心もとなく思ふ源氏……

(更級日記)

(ク)	(キ)	(カ)	(オ)	(エ)	(ウ)	(イ)	(ア)
思ふ	得	見	寝ね	し	閉ぢ	くる	出づる